

『原因論』と一三世紀のスコラ学

藤本 温

『原因論』は、西洋中世のある時期に、アリストテレスの『形而上学』A巻の完成版であると考えられていた。『原因論』に関する注釈書ないし問題集が、アルベルトウス・マグヌス、ロジャー・ベイコン、トマス・アクィナス、ブラバンティアのシゲルス、ガンのヘンリクス、バックフィールドのアダム、エギディウス・ロマヌスらによって書かれており、同書は他のスコラ学者たちによっても権威として引用されている。こうした人気の背景には、なによりもそれがアリストテレスの著作とみなされていたということがあるのだろう。

実際のところは、『原因論』のもとになったアラビア語の書——九世紀にバクダードで生まれたと言われる——は、クレモナのゲラルドウス(一一一四—一一八七年)によってラテン語に翻訳され、もとは『純粹善の書 *Liber de Expositione Bonitatis Puree*』というタイトルだったが、『原因論 *Liber de Causis*』という別のタイトルで流布した。後述のトマスによる発見以降、『原因論』はプロクロスの『神学綱要』を背景にもつ著作であることが知られており、また今日ではいわゆる Plotiniana Arabica の

影響があることも指摘されている⁽²⁾。本稿では、『原因論』を介しての一三世紀におけるプロクロスの間接的な影響の一端をトマスによる対応の変化を観察しつつ考察する。

一・『原因論』の著者問題

その前に基本事項を確認しておこう。メルベケのギヨムによる『神学綱要』のラテン語訳の完成(一二六八年五月一八日)の後、これを読んだトマスは『原因論』と『神学綱要』との間の密な関係に気づいたとされる。最晩年の著作『原因論注解』(一二七二年)の序で次のように言う。

「T1」『神学綱要』という題の二二一の命題を含む、プラトン学派のプロクロスの書がギリシア語で伝えられているのが見出される。他方、アラビア語では、ラテン語使用者の間で『原因論』と呼ばれるこの書が見出され、同書はアラビア語から翻訳されたことが知られているが、ギリシア語ではまったく流布していない。従って、その書はアラビアの哲学者の誰かによって、先述のプロクロスの書から抜粋されたも

のであると思われる。⁽³⁾

トマスは『原因論注解』を書いた際、三つのテクストを開いていたとされる。⁽⁴⁾すなわち、『原因論』(フテン語)、プロクロス『神学綱要』のフテン語訳、擬ディオニシウスの著作である。『原因論』は当時、いくらか疑いがあつたにもかかわらず、パリ大学ではアリストテレスの書として分類されていた。

疑いの一例として、アルベルトウス・マグヌスの言うところを見てみよう。マグヌスはこの筆者がアリストテレスではないことを既に認識していたとする研究者⁽⁵⁾らが依拠しているのは、マグヌスによる『原因論』注解の第二巻・第一章における次の記述であろう。

「T 2」わたしたちは、何であれ古代の人々によってうまく語られたことがらを、かれらから受け取っており、或るユダヤ人ダヴィド(David)が、それらをわたしたちより前に、アリストテレス、アヴィケンナ、アルファラビーの言葉から収集した。彼は、ユークリッドも幾何学においてそうしたように、公理の仕方でそれらを秩序づけ、かれ自身がそのコメントを附したのである。というのは、ちょうど、措定された公理がユークリッドのコメントによって何であれ証明されるように、ダヴィドもコメントを附しており、それは措定された公理の証明になっている。……ダヴィドは、先に述べたように、この書をアリストテレスのある文書(epistula)——それは普遍的原理に関するものとしてまとめられた——か

ら集めてきて、アヴィケンナとアルファラビーが語った多くのことを追加したのである。⁽⁶⁾

アリストテレス以外の人物の名前が挙げられている。注目されるのは、ダヴィド自身がコメント部分も書いたと言われていることである。周知のとおり、『原因論』には(そして『神学綱要』でも)、命題とそのコメントないし証明の部分がある。当時、『原因論』の筆者に疑いが持たれたことと連動して、命題とコメントの筆者を分けることが慣例となり、アリストテレスの言葉は命題部分だけで、コメントの方はアルファラビーによるものだという想定が流布して、マグヌスも『被造物大全』ではこれに従っている。⁽⁷⁾ベイコンも何度かアリストテレスの名を命題の著者として挙げたが、コメントについては執筆者の名を特定することはなかった。⁽⁸⁾しかし、右の引用では、命題もコメントともにダヴィドによるものであるとマグヌスはみなしているのである。アクィナスがこの点をどう考えていたかは明快ではないが、初期著作の中に、『原因論』の命題の筆者と注釈者(commentator)を区別しているように見えるものがある。⁽⁹⁾

他にも問題がなくはない。「初期のトマスは『原因論』の筆者はアリストテレスであると考えていた」という(研究者らによる)記述の根拠となるのは、初期著作『ボエティウス三位一体論注解』において、哲学者(Philosophus)としてその筆者を指定していることである。⁽¹⁰⁾ボナベントウラも同様に指定していた。⁽¹¹⁾哲学者と言われているにもアリストテレスとは限らないという見解もあるが、トマスは制度の中では通説を受け入れつつもいくらか疑念を

持っていたと考えるのが穏当ではないか。

マグヌスによるダヴィド説は、今日では反駁されたとみなされている。⁽¹³⁾ 注解書についても、マグヌスは「新プラトン主義者の著作を純粹にアリストテレス的に説明するという不可能な仕事を行う」立場におかれていたために、同書は完成度の低い著作となったのだと言われたこともあった。⁽¹⁴⁾ しかし、マグヌスだけでなく、トマスにも、そしておそらく一三世紀の他のスコラ学者たちにも、たとえ著者について疑いをもっていたとしても、『原因論』をアリストテレスの知識を用いて可能な限りそれと整合的に読解するというある種の制約があったと考えられるのではないか。この書はトマスによる発見以後もアリストテレスの著作として一七世紀の初めまで印刷されつづけたのである。⁽¹⁵⁾

二．認識の基本原理解

『原因論』に由来し、一三世紀に用いられた基本命題のひとつに、「受け取られるものが受け取られるものにおいてあるのは、受け取るもののあり方(modus)による」がある。これは認識に關しては、「認識されるものが認識するものにおいてあるのは、認識するもののあり方による」であり、トマスの他に、ロジャー・ベイコン、ボナベントウラ、ハレーシス、シゲルスらによつて用いられた。これら二つを以下では特に区別することなく「基本原理解」と呼ぶことにする。⁽¹⁶⁾ トマスは次の異論において基本原理解を用いている。

「T 3」ディオニシウスと『原因論』に基づいて言われるよ

うに、或るものにおいて受け取られるものはすべて、受け取るもののあり方に従つてそのものに受け取られるのであつて、自身のあり方によるのではない(*In 2 Sent.*, 17, 2, 1 arg. 3)。

基本原理解の出典としてディオニシウスが挙げられるのはこの一度だけであり、『原因論』が指定されることの方がはるかに多い。⁽¹⁷⁾ この原理は、トマスの『デ・アニマ注解』では次のように、変形して用いられた。

「T 4」形象が感覺器官ないし媒体に受け取られるのは、インテンティオのあり方による(per modum intentionis)のであつて、自然的形相のあり方によるのではない(*In 2 De anima*, p. 128, 269-271)。

ここで言うインテンティオ(志向)の元の言語がアラビア語であること、そしてこれが後にF・ブレンターノによる「中世のスコラ学者たち」の説として復活したこと、また、その後の影響についてはよく知られていることである。

「認識されるものが認識するものにおいてある」ということはアリストテレスの思想にかなうことであるが、「認識するもののあり方に従う」という部分はアリストテレスに登場することはない、この追加は『原因論』——さらにはプロクロス——に由来すると考えられる。しかし、トマス自身はこの追加部分もアリストテレスの思想であるとみなしていた可能性がある。

ウィップルは基本原理に関して、トマスの歴史的源泉は、アリストテレスの『デ・アニマ』、ボエティウスの『哲学の慰め』、そして『原因論』であると、一見すると驚くべきことを言っている。⁽¹⁸⁾ トマスは基本原理の出典として『デ・アニマ』を指定したことは一度もないのである。しかし、ウィップルがそれを知らなかったとは考えられないとすると、アリストテレスの『デ・アニマ』自体のうちに基本原理が含意されているとトマスは考えていると、ウィップルはみなしているのだらう。⁽¹⁹⁾ すなわち、トマスにとつて、「受け取るもののあり方に従う」という部分は、すでに『デ・アニマ』において暗黙のうちに含まれている、と。この可能性は、『原因論』がアリストテレスの著作とみなされていたという前提のもとではありそうなことであり、実際、トマスは『デ・アニマ』を注解する際に、基本原理を何度か用いているのである。⁽²⁰⁾

三．分有の不在とイデア

『原因論』命題八

次に、基本原理について『原因論』と『神学綱要』との対応をみる。基本原理の出典は研究者らによって複数の箇所が指定されているが、『神学綱要』命題一七三もそのひとつである。⁽²¹⁾ 同箇所はトマス自身が『原因論』命題八と関連が深いとみなしているものである。まず『原因論』命題八を引用する。

「T 5」『原因論』命題八

そして同様に、すべて知る者が、よりすぐれたものや、より下位のより劣ったものを知るのは、知る者自身の実体とその

存在のあり方による (secundum modum suae substantiae et sui esse) 以外にはなく、事物が存在するあり方によるのではない (non secundum modum secundum quem res sunt)。

『神学綱要』命題一七三の次の証明部分(下線部)がこれに対応するであらう。

「T 6」プロクロス『神学綱要』命題一七三

それぞれのものは、自らの本性に従って、よりすぐれているものを分有するのであつて、よりすぐれているもののあり方に従って分有するのではない。そうでなければ、すぐれたものは、すべてのものによって同じ仕方で分有されることになっただらう。だが、様々な(分有する)ものが、様々な仕方で分有するのである。それ故、分有は、分有するものの固有性と力に応じてなされることになる。従って、知性においては、知性に先立つものが知性的な仕方であることになる。

下線部のうち、「分有する」はギリシア語で μετέχει、ギョムのラテン語訳で participat⁽²²⁾ である。しかし、「T 5」ではその語が不在である。分有は消去(ー)されてしまったのだろうか? 実は、『原因論』全体を見渡しても分有(participatio)という語は一度も使用されていない。これはなぜか指摘されることはほとんどないが、強調しておかなければならない。⁽²³⁾ 分有概念の不在が、同書をアリストテレスの著作とみなしたいという思いを強くさせた

と考えられるからである。もちろん、トマスは『原因論注解』において『神学綱要』を何度も引用しているから、説明のために分有という語があらわれることはあるが、この命題八に関しては、注解でも用いられない。アクィナスは『原因論』命題八の注解において、『神学綱要』命題一七三を引用する際、分有概念が登場しない箇所を引用している。

トマスは、晩年に『神学綱要』のラテン語訳を読んで、多少、とまどったのではないか。分有概念を用いて認識を説明するプラトン説に反対してきたにもかかわらず、自ら用いてきた基本原理が分有概念で説明されているのである。これまで基本原理を用いて論じてきたことはどうなるのか？それが可能だったのは、『原因論』がアリストテレスの著作であることは、一応、公認されていたということがあるだろう。そうではないと納得した後期においては、(今述べたことが理由かどうかはわからないが)トマスは基本原理自体を保持しつつも出典を「示す」ことはなくなるのである。

『原因論』命題二四

基本原理の出典と考えられる他の箇所として『原因論』命題二四をみる。

「T7」『原因論』命題二四

第一原因はあらゆる事物において一つの状態に従って存在するが、しかし、あらゆる事物が第一原因において一つの状態に従って存在するのではない。

なぜなら、第一原因はあらゆる事物において存在するといえ、それぞれの事物は、自らの能力のあり方に従って第一原因を受け取る(*unaquaeque rerum recipit eam secundum modum suae potentiae*)からである。

なぜなら、諸々の事物のうちの、或るものは第一原因を単一的な受容によって受け取り、また或るものはそれを多数化された受容によって受け取る。また、或るものはそれを永遠的な受容によって受け取り、或るものは時間的な受容によって受け取る。また、或るものはそれを霊的な受容によって受け取り、或るものはそれを物的な受容によって受け取るのである。

ここでも分有概念は用いられていない。トマスは命題二四の注解を次の言葉で始める。「(『原因論』の)筆者は、神の支配の仕方と、支配のための神の充足性を示した後で、ここではいかなる仕方で神の支配が様々な仕方々々なるものによって分有されるかを示し始める⁽²⁹⁾」。命題二四のトマスによる注解部分に「分有」が現れるのはこの一度である。『原因論』命題二四ではむしろ、受容(*receptio*)ないし受け取る(*recipere*)という言葉が用いられ、トマスの当該箇所の注解もこれに従っている。この命題二四に対応するのは『神学綱要』命題一四二である。

「T8」プロクロス『神学綱要』命題一四二

神々はすべてのものに等しく臨在する。しかし、すべてのものが神々に等しく臨在するわけではない。それぞれのもの

は、自らの位階と力にしたがって神々の臨在を受け入れる (μεταλαμβάνει) のである。すなわち、或るものは神々を単一なものとして、他の或るものは多様化されたものとして受け入れ、また或るものは永遠な仕方、他の或るものは、一時の間受け入れ、さらに或るものは非物理的に、他の或るものは物理的に受け入れるのである。

(証明)

同一のものを分有するときに生じる差異は、「分有するもの」の差異によるか、それとも「分有されるもの」の差異によるのでなければならぬ。しかし、神的なものはすべて、常に同じ位階をもっており、下位のあらゆるものと関わりを持たず、混じり合うこともない。それ故、残るところは、相違は「分有するもの」だけから生じるということ、そして、下位の分有するものは同一性を欠いていること、それらが神々に臨在するのは、様々な仕方、様々なときに、様々な仕方、様々なものがそうするということである。従って、神々はすべてのものに等しく臨在するけれども、すべてのものが等しく神々に臨在するわけではなく、それぞれが可能な仕方、神々に臨在するのであり、臨在するのに応じて神々を享受するのである。なぜなら、分有は、神々の臨在という尺度によるからである。

分有する (μετέχειν) という語は命題部分にはないが、証明部分にあらわれる。ギョムのラテン語訳における分有概念の配置も同様である。

二つのことが注目される。第一に、神々に言及するプロクロスの世界観が、『原因論』では第一原因に変更されている。第二に、「T 8」の後半にあらわれる分有概念は消去され、受容 (receptio)、受け取る (recipere) が用いられている⁽²⁵⁾。

トマスは『原因論』命題二四の注解においてこの『神学綱要』命題一四二を引用しているが、その際、右で引用された後半、すなわち、分有概念が出てくる証明部分は引用しない。同命題の注解冒頭で一度だけ用いられるとはいえ(前頁下)、その語の使用が意図的に避けられていると感ぜられる。同じ傾向は、基本原理の出典の一つとして研究者によって指定されている『原因論』命題二〇と、関連箇所である『神学綱要』命題一二二を比較するときにもみられる。

こうした対応を行うトマスの意図を的確に言い当てることはできないが、注解の序の冒頭がアリストテレス『ニコマコス倫理学』第一〇巻の幸福論への言及で始まっていること、また注解においていわば切り札として何度か用いられる「信仰とアリストテレスによれば」という言葉から、トマスが一貫してアリストテレスの立場を保持していることはわかる(ディオニシウスもそれに加える必要があるだろう)。しかし、『原因論』がアリストテレスによるものではないと納得したとき、晩年のトマスが同書に対してどの程度の距離をとろうとしているのかは話が細部に及ぶと判然としない。

一方、トマスはもともと『原因論』に大きな信頼を寄せていたわけではないと判定され得るテキストもある。初期の『命題集注解』において、「その題材においては『原因論』の権威を受け入

れるべきではない⁽²⁶⁾」と、また、後期に近い『能力論』でも、「この誤りは『原因論』に明らかに含まれている。下位の被造物は上位のものが媒介して神によって創造されたというのがそれである。従って、この点においてはその書の権威を受け入れるべきではない⁽²⁷⁾」として、『原因論』における知性の媒介創造説を否定している。しかし、晩年の『原因論注解』においては『原因論』に優しい対応がとられているということを近年のいくつかの研究は示している⁽²⁸⁾。

アイデアの不在

「すべて知性者は形相で満ちている」ではじまる『原因論』命題一〇について、トマスは、『神学綱要』命題一七七「すべての知性は諸々の形象で満ちており、或る知性はより普遍的な形象を、或る知性はより個別的な形象を含み得るものである⁽²⁹⁾」との関わりを指摘し、「この点に関してキリスト教の信仰とより調和的であるアリストテレスの見解に従って⁽³⁰⁾」、プラトン学派による離在形相——アイデア——の指定を廃することを宣言する⁽³¹⁾。しかし、すべてを否定するわけではなく、分有概念の限定的使用を認める。すなわち、「(離在的知性は)このような可知的形相を、純粹な善性である第一の離在形相の分有によって、すなわち、神の分有によって獲得するとわたしたちは言う⁽³²⁾」(p.68, 3-6)のである。

ところがそもそも、『原因論』の筆者はアイデアを指定してはいない、とアクイナスは理解している。「この書(『原因論』)の筆者は離在形相を指定しているとは思われない……」(p.80, 7-8)のであり、その理由は、第一のものだけを指定しているから、つまり、

神々を指定するのではなく、第一原因(単数の神)を指定しているからである、とされる。

トマスがアイデアを拒絶する理由は、プラトン主義者が「離在的な第一の諸形相を、それらがそれ自身普遍的である限りで『神々』と呼んだ⁽³²⁾」からである。一方、『原因論』の筆者が単数の第一原因をたてるのは、擬ディオニシウスに従って⁽³³⁾、「わたしたちは多数の神々ではなく、唯一の神を指定する⁽³⁴⁾」(p.20, 10-11)のだという。なお、『原因論』の筆者が歴史的に擬ディオニシウスの影響を受けたかどうかについてはここでは立ち入らない。

四・媒介創造の問題

基本原理は、『原因論』における原因についての思想を前提している。トマスは当初、『原因論』の思想は媒介創造説を含んでいるとして批判していたが、晩年にはその批判を緩めており、ここには解釈の転換が見られる。

批判の緩和1

トマスは『能力論』(3.4, ad10)において、媒介創造説を『原因論』に帰して批判している⁽³⁵⁾。初期の『命題集注解』(In 2 Sent., 18, 2, 2)でも、「理性的魂は神から天使を媒介としてやってくるのか」を論じる際に、類似の立場としてアヴィケンナの名を挙げて問題視していた。「第一原因は、媒介なしに知性者を創造するが、魂や自然や他の諸事物を、知性者を媒介として創造する」(『原因論』命題九)という言葉は当然問題になるが、『原因論注解』では、この箇所は次のように優しく解釈される。

「T 9」理解されるべきことは、第三命題において述べられたように、これらのもの（魂や自然等）の存在が知性者によって創造されたということではなく、むしろ、それら（魂や自然等）はその本質については、第一原因によってのみ創造され、一方、付加される（superaddita）或る完全性を知性者によって受け取るという二つある（Thomas, *SLDC*, p. 62, 14-17）。

『原因論』の言葉を、創造自体は第一原因が行い、知性者は付加される或る完全性を下位のものに与えると解釈しなおして、批判はしない。他の箇所ではさらに、「先に著者が、知性者は魂の原因であると言ったとき、彼は、知性者は創造という仕方で魂の原因であると理解していたのではなく、……もっぱら形相付与（*informatio*）という仕方で魂の原因である、と理解していたことは明らかだ⁽³⁶⁾」と言う。文字通りには『原因論』は知性者に因果的役割を帰しているように見えるとしても、註解においてトマスは、知性者に創造ではなく形相付与の役割を割りあてているのである。

批判の緩和2

基本原理の出典のひとつである『原因論』命題八の冒頭では次のように言われる。

「T 10」『原因論』命題八冒頭

すべて知性者は、自己の上位にあるものと自己の下位にあるものを知る。ところで、自己の下位あるものを知るのは、そのものの原因であるからであり、自己の上位にあるものを知るのは、そのものから諸々の善を取得するからである。

『能力論』では、「T 10」における下位のものに関する発想「知性が自らの下位のものを知るのは、下位のものにとって知性が原因である限りで、知性の実体のあり方による」が、「知性者は創造できる」という結論につながる（³⁷）ことが指摘されて、『原因論』の権威はあてにならないことは「同様」（*De Pot.*, 3, 4, *ad* 11）であると言われる。

しかし、註解では「T 10」に関して、「この命題の意味するのは、表面的には（*ad superficiem*）、原因であることが知性者の認識の働きの根拠である」と思われるが、これは真ではないという。

「T 11」他方、知性者が下位のものを自らの知識によって原因するのであるとはいえ、下位のものを原因するがゆえにそれを知るのではなく、下位のものを知るが故にそれを原因するからである。（Thomas, *SLDC*, p. 55, 19-21）。

表面的理解とは、「知性者は下位のものを原因するが故に下位のものを知る」とするものである。この表面的理解は、知性者の果たす機能（原因性）を大きく見積もりすぎている、いいかえると、第一原因の役割を低く評価して、知性者に媒介的創造を配することになりかねない（創造は神である第一原因の独占的な業で

ある)。トマスは注解では、知性者は「下位のものを知るが故に、それを原因する」と理解して、できるかぎり知性者の原因性ないし創造への関与が軽減できるように解釈しようと試みているのである。

この表面的理解について、トマスはそれを『原因論』自身に、そしてプロクロスにも帰して批判しているという見方もあるが、これはおそらく、自分自身が以前に『能力論』において述べたような（文字通りの？）理解を表面的と言っているのではないか。トマスは注解では、それを優しく解釈しようとしているのである。

トマスによる注解の数年後に『原因論問題集』（一二七四―一二七六年）をまとめたブラバンティアのシゲルスは、「一つの知性者が他の知性者を認識するのか」を論じた際に、「T 10」に関連する今の問題について次のように書いた。それでも『原因論』を優しく解釈する傾向がみられる。

「T 12」その筆者は、その命題によつて、知性者が、自分の下位にあるものを原因することによつて、自分の下位にあるものを知性認識すると言おうとしているのではない。また、自分の上位にあるものによつて原因されることによつて、自分の上位にあるものを知性認識すると言おうとしているのではない。むしろ、その箇所で措定されたその命題の証明によつて、また、そこからそれが取られているプロクロスの命題によつて明らかのように、知性者は、存在という点では媒介するものであるから、つまり、媒介するものであるというその本性と実体のあり方に従つて、或るものよりも劣つて

いたり、或るものよりも優れているのであるから、知性者は原因であり原因されたものであるという性格を持ちつつ、その他のものを認識するのである。従つて、それは或るものどもに關しては原因の性格を持つており、それらよりも優れているのである。一方、知性者は原因されたものであるという性格を持つこともあり、その場合は劣っているのである。従つて、何であれ認識されるということは、認識されるものが認識するものにおいて認識するものの本性のあり方に従つて（secundum modum cognoscentis naturae）あることによるのであり、そしてそのようにして知性者は自分とは異なるものを自らの本性の在り方に従つて認識するのである（Sigerus, *Quaestiones super Librum de causis*, p. 168. 63-76）。

「T 12」前半の、知性者は下位のものを「原因することによつて認識するのではない」ということは、「T 11」と同趣旨であるとなしよてよいだろう。「T 12」の少し後の箇所では、「それ故、彼（『原因論』の筆者）は、或るものが知性者に関して原因ないし原因されたものの性格を持つということから、その或るものによつて知性認識される、と言おうとしたのではなかつた」ことが再確認される。「原因であること」と「認識すること」との先後関係は、『原因論』の筆者自身にとつてはあるいは問題ではなかつたのかもしれないが、一三世紀のスコラ学者にとつては媒介創造説との関わりで問題となり得たのである。

五・結語

先に『原因論』二四命題(T 7)について見たが、次も基本原理の一つである。

「T 13」『原因論』命題二四

そしてその受容の多様性は、第一原因からではなく、受容者の故に生ずるのである。

この対応箇所である『神学綱要』命題一四二「T 8」「相違は分有するものだけから生じる」との関連を考えると、「T 13」の記述「受容の多様性は、受容者の故に生ずる」は、「(受容者)だけ」ということを含意しているのだろうか。ここでこの点を精査することはできないが、トマスは『自然学注解』において「受容者の多様性だけ」(*tantum*)で事物の多様性を指定することは、プラトンの見解である⁽⁴⁾と言っていることが想起される。

認識に関して言えば、トマスは『神学大全』において、プラトン主義を代弁する異論(ST 1, 79, 3, arg3)を取り上げて、「能動者の似姿が受動者に受け取られるのは受動者のあり方に従う」という、基本原理と類似の言明を提示する。トマスはその異論に対して、この言明を全面否定するのではなく、それは「能動者の指定」を外さなければ成り立つという主旨の回答を行う。すなわちトマスの場合、「受動者のあり方に従う」と言われても、能動者の不在、ないしまったくの受動が認識に関して基本原理に含意されているわけではない。

とすると、後に『原因論』がアリストテレスのものではなくプラトン主義的著作であることを納得したとき、トマスは、一方で可能な限り『原因論』の思想内容を救おうとしつつも、「受容者のみ」という点には賛同することはできなかったのではないか。そうであるならば、初期において『原因論』を基本原理として引用したことは(先とは別の意味で)表面的理解だった可能性がある。だがたとえそうだとしても、認識の問題に関する限り、トマスはその文言自体を捨ててはいない。その文言は、能動者(能動知性)の指定に関して中立的であり、その指定の有無が自分とプラトン主義とを分かつものであるとトマスは理解していると思われるからである。

以上のような、著者問題がらみでのトマスによる『原因論』への対応の変化は、他の問題——完全な還帰(*reditio*)や自己の本質の認識——についても見られるだろう。或る時期までトマスは、その思想形成において『原因論』の、従って擬アリストテレスの影響下にあったと考えられるのである。

【文献】

- Boese, H. (1987): *Proclus Elementatio Theologica translata a Guillelo de Morbecca*, Leuven UP.
- Bridges, J. H. ed. (1897): 'The Opus Maius' of Roger Bacon, vol II, Oxford.
- Costa, C. (1995): *Recherches sur le Liber de causis*, Études de philosophie médiévale 72, Paris: J. Vrin.

- De Vogel, C. J. (1966): Some reflections on the *Liber de causis*, Vivarium, vol. 4, pp. 67-82.
- Dodds, E. R. (1963): *Proclus The Elements of Theology*, A Revised Text with Translation, Introduction and Commentary, Second Edition, Clarendon Press.
- Fauser, W. ed (1993): *Alberti Magni ordinis fratrum praedicatorum De causis et processu universalis a prima causa* (S. Alberti Magni operum omnium, tomus 17, pars 2), Monasterii Westfalorum in Aedibus Aschendorff.
- Guagliardo, V. A., Hess, C. R., Taylor, R. C. (1996): *St. Thomas Aquinas Commentary on the Book of Causes*, CUA Press.
- Henle, R. J. (1970): *Saint Thomas and Platonism*, The Hague, Martinus Nijhoff.
- Ho, J. C. Y. (1972): La doctrine de la participation dans le commentaire de saint Thomas d'Aquin sur le Liber de causis, *Revue philosophique de Louvain*, vol. 70, pp. 360-383.
- Lohr, C. H. (1986): The Pseudo-Aristotelian Liber de Causis and Latin Theories of Science in the twelfth and thirteenth centuries, in *Pseudo-Aristotle in the Middle Ages*, ed by Kraye, J., Ryan, W. F. and Schmitt, C. B., The Warburg Institute, London, pp. 53-62.
- Marlasca, A. (1972): *Les Quaestiones super Librum de causis de Siger de Brabant*, Philosophes Médiévaux Tome XII, Louvain.
- Saffrey, H. D. (2002): *Thomas d'Aquin Super Librum de Causis Expositio*, Librairie Philosophique, Seconde édition corrigée, J. Vrin, Paris.
- Selner-Wright, S. C. (1995): Thomas Aquinas and the Metaphysical Inconsistency of the LIBER DE CAUSIS, *The Modern Schoolman*, LXXII, pp. 323-336.
- Steele, R. (1935): *Opera hactenus inedita Rogeri Baconi Fasc. XII, Quaestiones Super Librum De Causis*, Oxonii : E Typographeo Clarendoniano.
- Strasser, M. W. (1963): *Saint Thomas' Critique of Platonism in the Liber de Causis*, Dissertation, University of Toronto.
- Taylor, R. C. (1998): Aquinas, the Plotiniana Arabica, and the Metaphysics of Being and Actuality, *Journal of History of Ideas*, vol. 59, pp. 217-239.
- Torrell, J.-P. (1993): *Saint Thomas Aquinas volume 1*, translated by Robert Royce, The CUA Press.
- Weisheple, J. A. (1980): The Life and Works of St. Albert the Great, in *Albertus Magnus and the Sciences*, Commemorative Essays 1980, ed. by Weisheple, J. A., Pontifical Institute of Medieval Studies, pp. 13-51.
- Whipple, J. F. (1988): Thomas Aquinas and the Axiom "What is Received is Received According to the Mode of Receiver", in *A Straight Path*, ed., R. Link-Salinger, CUA Press, pp. 279-289.
- ヘルム・ユ・グレン(一九九九):『中世哲学史』(図説) 智永野潤(永野拓也訳)新評論。
- 藤本温(二〇〇四):「媒体における形象と『原因論』

——「三世紀スコラ学における知覚論——」、『新プラトン主義研究』第三号、六五—八〇頁。

【註】

- (1) Taylor (1998) p. 217 によると、少なくとも二七の注解が書かれ、『原因論』の約二四〇の写本がある。
- (2) cf. Costa (1995), Taylor (1998).
- (3) *Super Librum de Causis*, p. 3, 3-9. 以下、同書を *SLDC* と略記する。
- (4) Torrell (1993) p. 222. 元は Saffrey による。
- (5) Weisheipl (1980) p. 41.; Lohr (1986) p. 58. なお、以下、本文と註における強調は、特に断らない限り筆者(藤本)による。
- (6) Albertus, *De causis et processu universitatis a prima causa*, pp. 59-61. この注解書の執筆時期を Gualardo (1996) p. xi は一二六五—一二七二年とする。アルベルトウスは注解において、ギヨムによる『神学綱要』のラテン語訳に言及していないことから、執筆は一二六八年以前であると推定されることとなる。
- (7) Steele (1935) p. xviii.
- (8) *Ibid.*, p. xviii.
- (9) *In 2 Sent.*, 19, 1, 1 c.
- (10) *In de Trin.*, 6, 1, 3, arg 2.
- (11) Bonaventura, *In 1 Sent.*, 43, 1, arg. 5.
- (12) Guagliardo (1996) p. x で紹介されている Vansteenkiste

の議論。

- (13) アラン・ド・リベラ(一九九九)一〇九—一〇頁。
- (14) Steele (1935) p. xix.
- (15) Steele (1935) p. xviii.
- (16) 区別が必要な場面があることは承知しているが、本稿の範囲内では区別しない。Cf. Henle (1970) p. 331.
- (17) 希にボエティウスが挙げられる。
- (18) Wipple (1988) p. 289.
- (19) Wipple は「認識するものにおいてある」という部分の典拠として『テ・モニム』を挙げている可能性もある。
- (20) *In 2 De anima*, p. 115, 74-6; *ibid.*, p. 169, 35-36.
- (21) Gualardo (1996) p. 74, n. 1. 以下、『原因論』の命題番号はトマスによるものに従う。
- (22) Boese (1987) p. 84.
- (23) Strasser (1963) p. 170 は、分有概念は carry over されていると言いが、そうだろうか。
- (24) *SLDC*, p. 120, 1-3.
- (25) なお、『神学綱要』命題一四二において「受け入れる」と訳したギリシア語 “μεταλαμβάνει” は、ギヨムの訳では “transsumunt” となる。
- (26) *In 2 Sent.*, 18, 2, 2, ad 1. cf. Lohr (1986) pp. 58-9.
- (27) *De Pot.*, 3, 4, ad 10. 他に、同 ad 11 も参照(後述)。
- (28) Selner-Wright (1995), Ho (1972) を参照。Strasser (1963) は批判を強調する傾向があるが、pia expositio なる点にも認めている。

- (29) 訳はトマスの注解で引用されているラテン語から。以下、トマスによる引用については同様。
- (30) *SLDC*, p. 67, 26-27.
- (31) De Vogel(1966)によると、アキナスのプラトン解釈は“looks like a parody”(p. 69)である。
- (32) *SLDC*, p. 19, 27-28.
- (33) *ibid.*, p. 20, 21-24.
- (34) cf. De Vogel(1966) pp. 68-9.
- (35) 先の註二七は、次の異論に対する解答である。『原因論』では、第二の知性者であるものは、上位の知性者の媒介なしには、第一原因から出てくる第一の諸善を受け取ることはない、と言われる。ところで、存在するというそのことは第一の諸善にかかわる。それ故、第二の知性者は第一の知性者を媒介することなしには存在を受け取ることではない。そしてそのようにして、神は創造の働きを或る被造物に伝えるのであると思われる(『*De Pot.*, 3, 4, arg. 10)。
- (36) *SLDC*, p. 104, 14-17.
- (37) *De Pot.*, 3, 4, arg. 11.
- (38) Strasser(1963) p. 103.
- (39) シゲルスが用いた『原因論』のテキストは「T 10」とは若干異なるようであるが、主旨は同じである。
- (40) Sigerus, *Quaestiones super Librum de causis*, p. 168. 83-4.
- (41) *In 7 Phys.* 1. 7. (11).